

ぬ し 塗師 樽井宏幸さん

漆が木に命を吹き込む

世界遺産にもなっている奈良県の興福寺が、およそ3世紀ぶりに中金堂を本格再建した。

10月にはその落慶法要が行われる。その中金堂で使われる論議台と2基の前机の漆塗りを担ったのが、樽井宏幸さんだ。時間との戦いでもあったこの仕事で樽井さんは「やれることはすべてやった」と言い切る。

万が一のときは切腹もの

関西地方に大きな被害をもたらした台風21号が上陸した日、樽井さんは興福寺境内に設けられたプレハブの中で論議台に仕上げの漆を塗る作業をしていた。

外は猛烈な雨と風が吹き荒れていた。ミシミシミシ…。風にあおられた松の大木が、不気味な音を立てていた。

「万が一、木が倒れてこのプレハブを押しつぶすようなことでもあれば切腹ものだ」

樽井さんはそんなことを思いながら黙々と作業を続けた。

翌日、プレハブからはだいぶ離れていたが、大きな松の木が根こそぎ倒れているのを見て、樽井さんは肝を冷やした。切腹とまではいなくても、樽井さんはこの仕事に全身全霊を傾けていたのだ。

興福寺の中核施設である中金堂は、奈良時代初めの建立以来、戦乱や火災でこれまでに7度も焼失してきた。その中金堂が約300年ぶりに再建されることとなり、内部の柱や論議台

などに漆を塗る重要な仕事を樽井さんが任されたのである。論議台は中金堂の本尊を挟むように左右に置かれ、法要のときには講師と読師が座る。論議台は高座とも呼ばれ、落語などの演芸で高座に上がるというのは、ここからきているとされる。

樽井さんの父は、奈良漆器界の重鎮の樽井喜之さん。樽井さんは21歳のとき父に弟子入りし、修業を積んできた。29歳のときには父とともに薬師寺大講堂再建のプロジェクトに参加し、内陣一式の漆を仕上げる仕事を経験した。

「それまでは研ぎ、下地、中塗り、上塗りなど漆工に必要な工程を、それぞれ点で覚えていました。それが薬師寺の仕事ですべての点がつながり、1本の線になりました。技術についての自信がこのとききました」

少なくとも100年は持つ

30歳を過ぎたころ父から離れて独り立ちした。昨年は手向山八幡宮(東大寺八幡宮)の祭礼で使われる「御鳳輦」と呼ばれる神輿(国重要文化


財)の仕事もした。こうした実績が評価されて興福寺の仕事も任されることになったのだ。

興福寺の仕事をするに際し、樽井さんは若手の漆芸作家など6人を集めてチームを組んだ。このとき樽井さんは、全員が同じ価値観を持つようにすることに心を砕いた。

「奈良の場合、時間のスパンが違います。平安時代のもものがたくさん残っているし、室町時代のもものがまだ新しいと言われる土地柄です。興福寺の論議台なども、何百年も使うことが前提になっています。僕は漆のことを、木を長持ちさせるための塗装と考えています。もちろん漆を塗ればきれいになるのですが、最終的に大事なものは長持ちさせること。そういう考え方を理解できる人に集まってもらいました」

だが、樽井さんはいきなり、予想外の事態に直面することになった。2018年の年明け早々から作業を始めるはずだった予定が寺側の意向で変更になり、論議台などの作業開始が3月にずれ込んだのだ。

「中金堂の落慶法要は10月と決まっ



たるい・ひろゆき 1974年、奈良県生まれ。樽井家は江戸時代から続く塗師の家系。樽井さんは7代目になる。「小学校の卒業アルバムに『お父ちゃんの跡を継ぐ』と書いています。親父に洗脳されたんでしょう」と笑う。その父親の喜之さんのことを樽井さんは「天才です」という。4児の父。



ていましたから、3カ月近い遅れをとにかく取り戻すしかありませんでした」

遅れを取り戻すのは難しいことではない。漆を塗る回数を減らせばいいだけだ。回数を減らしても、仕上がりの見た目は何ら変わることはない。だが、樽井さんはそうしなかった。塗りの回数を減らすと、持ちが悪くなるからだ。仕上がり最も堅牢になると言われる本堅地^{ほんかたじ}の技法を用い、下地の工程も下塗り～中塗り～上塗りの工程も、回数は一切減らさなかった。

「今回の仕事は漆をふんだんに使うことがポイントでした。一番多いところでは下地を15回、本塗りを4回重ね、漆の厚さが2ミリくらいになりました。自分史上最高の厚さですね。この論議台、少なくとも100年は持つはずです」

漆は湿気で乾く

落慶法要のとき、論議台は1週間

前後、中金堂の中ではなく外に置かれることになる。10月だから炎天下というほどではないだろうが、晴れば日差しは相当強くなる。

薬師寺の仕事をしたときも落慶法要には論議台などが外に置かれた。このときは5日程度だったが、それでも論議台の屋根は手で触れないうらい熱くなっていた。

「塗師屋にすればそれは恐怖以外の何ものでもありません。万が一、熱

論議台の設計図。「課題は想像力」と樽井さんは言う。「型通りかちっとはできるし、1から2は得意。ただ0から1を生み出すことはこれからの課題」。



で漆の面が割れたりしたら、とんでもないことになります。幸いこのときは割れるようなことはありませんでしたが、今回は落慶の日ぎりぎりまで仕事をしようと思いました。そうして自分を追い込んだ結果が、これだけの厚さになったわけです」

最終的に使った漆の量は、下地で約80キロ、本塗りで約6キロに達した。これだけの量になるとコストもかさむので、下地には比較的安価な中国産の漆を使用した。本塗りに使ったのはすべて国産の漆だ。

何としても落慶法要に間に合わせなければならない。それは時間との戦いでもあった。

ただ、幸い天候には恵まれた。タイミングよく、梅雨時に下地の作業をすることになったからだ。

「漆は湿気で乾くという特性があります。だから下地の作業を何度繰り返しても、比較的早く乾いたのです」

漆は酸化することによって堅くなる。そのためには適度な湿気が必要になる。湿気で乾くとは、そういう

たるい・よしゆき 1943年、奈良県生まれ。1966年から父・樽井直之氏に師事。28歳で唐招提寺の講堂の仕事に携わって以来、塗師として数々の寺社仏閣の再建・修復に貢献してきた。春日大社の大塗師職預として樽井禧酔(きすい)の名も持つ。



ことだ。

早く乾かしたいときは、作業場に水をまいたりして湿度を高める工夫もした。だが、そういうことをしても湿度はせいぜい70%くらいまでしか上がらない。ところが土砂降りの日にはプレハブの中も湿度が100%くらいになる。

「自然には勝てません」

そう言って樽井さんは苦笑する。

まっすぐ塗る力がある

樽井さんの下で一緒に仕事をした6人は、この間も作家としてそれぞれの仕事をしていた。樽井さんも普段は小さなお椀や盆などを塗る仕事をしている。人に頼まれ、太さ40センチの木をくり抜いたワインクーラーをつくったこともある。しかし興福寺の仕事をしている間は、そうした仕事を一切せず、毎日プレハブの作業場に通った。

「手を抜こうと思えばいくらでも抜ける仕事です。でも、手を抜いたら

気持ち悪い。人間としてやれることはきちんとやりたいし、最善を尽くして失敗するのは仕方がないにしても、最善を尽くさないで失敗するのは嫌じゃないですか。出来栄えについては後世の人が評価すればいいことですが、やれることはやり尽くしたと思っています」

興福寺の落慶法要が終わっても、樽井さんはのんびりなどしてられない。次は唐招提寺の論議台の屋根

を修復する仕事が入っている。実はこの屋根は樽井さんの祖父と父が漆を塗ったものと伝えられている。

「祖父は両利きだったと父から聞いています。祖父がどんな仕事をしたのか、間近で見られるいい機会なのでとても興味があります」

昨年、手向山八幡宮の神輿の仕事をしていたとき、父の喜之さんが密かに見に来たことを後で知った。

「一言『あかん』と言って帰ったそうです」

興福寺の仕事をしているときは半年間、父は一度も見に来なかったという。その喜之さんが樽井さんの仕事ぶりについてこう言う。

「漆はまっすぐ塗るのが一番難しい。でも、息子はまっすぐ塗る力があります。自分で仕事を取ってきて、ちゃんとやっている。大きなものを塗れる者は小さなものも塗れます。そこの塗師屋には負けていないんじゃないですか」

奈良漆器の重鎮も認める若手の塗師が今、力強く羽ばたき始めている。

奈良漆器=飛鳥時代に中国から伝わり、1300年の歴史を持つ日本を代表する漆器工芸。夜光貝や白蝶貝などを用いた装飾技法の螺鈿(らでん)を用いるのが最大の特徴。

